論　文　ニダバ (*Nidaba*) 42(2013), 60-69

カムチベット語格咱／普上［Phuri］方言の方言特徴

鈴　木　博　之

1　はじめに

本稿では、雲南省迪慶藏族自治州香格里拉県格咱郷普上村で話されるカムチベット語 Phuri 方言の音形式とチベット文語形式（以下「蔵文」）との対照を行い、また周辺の方言との対比を通して同方言の特徴を考察する。

1.1　議論の背景

迪慶州のカムチベット語は、筆者の下位分類（Suzuki (2012) 一部修正）において次のようになり、その中で Phuri 方言は Sems-kyi-nyila 方言群の独立下位方言を形成している。

方言区分	下位方言区分	所属方言例（迪慶州に限る）
Sems-kyi-nyila 香格里拉	rGyalthang	rGyalthang, Yangthang, mTshongo
	雲嶺山脈東部	Nyishe, Thoteng, Byagzhol, Qidzong
	Melung	Melung, mThachu, Zhollam
	Lamdo	Lamdo
	Phuri	**Phuri**
sDerong-nJol 得榮徳欽	雲嶺山脈西部	Foshan, nJol, lCagspel, Tsharethong, sNyingthong, Sakar, Budy
	sPomtserag	sPomtserag
	mBalhag	mBalhag
	gYagrwa	gYagrwa
Chaphreng 郷城	gTorwarong	gTorwarong, Nagskerag

本稿で議論する Phuri 方言は、筆者の初歩的な分析から Sems-kyi-nyila 方言群の独立下位方言であるとしているが、その具体的な言語特徴についてはまだ示されていない。本稿は Phuri 方言の形式を蔵文と対照することを通じて、方言特徴を具体例とともに概観することを目的とする。Phuri 方言が話される地域は、香格里拉県北部を南北に貫く主要交通路沿いに形成された普上村という村落のみである。北に Chaphreng 方言群の諸方言が話され、南に rGyalthang 下位方言群に属する方言が話される。加えて、普上村にはもともとから同村に居

住していた一族（２戸）と村北部から移住していた人々（20戸程度）がおり、話す言語に異なりが認められるという。本稿で記述するのは前者の変種である。

1.2　本稿で用いる言語資料

本稿で議論する方言資料は、特に断りのない限り、筆者自身の調査によって得たものを用いる。主として議論するPhuri方言の調査協力者はツェリン・ヤンゾン[Tshe-ring g.Yang-'dzom]さん（女性）である。調査は2011年、香格里拉県格咱郷初古村で行った。

2　Phuri方言の音体系概観

Phuri方言の音体系は以下のようである。

【音節構造】最大で $^{C}C_{i}$GVCC、初頭子音が鼻音のときCCGVCCもある。

注：音節末子音が２つ存在する場合、最後の１つは/ʔ/である。

【声調】語声調で、¯：高平、´：上昇、`：下降、ˆ：上昇下降の４種。

【母音】各要素に対応する長母音・鼻母音が存在する。

i　ʉ　ɯ u
e　ə ɵ　o
ɛ　ɔ
a　ɑ

【子音】子音連続に現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前	硬口蓋 後	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	pʰ	tʰ	ʈʰ		cʰ	kʰ	
	無気	p	t	ʈ		c	k	ʔ
	有声	b	d	ɖ		ɟ	g	
破擦音	無声有気		tsʰ		tɕʰ			
	無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʑ			
摩擦音	無声有気		sʰ	ʂʰ	ɕʰ		xʰ	
	無気		s	ʂ	ɕ	ç	x	h
	有声		z	ʐ	ʑ		ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̊		ŋ̊	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音		w				j		

子音連続には主として前鼻音、前気音、わたり音を含むものがある。

3　Phuri 方言の形式と蔵文との対応関係

蔵文と口語との音対応を探る作業は、口語の発展を分析する重要な手段の 1 つである。ここでは初頭子音と母音＋末子音の 2 種に分けて、蔵文と Phuri 方言との音対応について述べる。声調に関する議論は行わない。また、それぞれの項目において、周辺のチベット語方言との対比について簡潔に述べる。なお、チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。

3.1　初頭子音

3.1.1　閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

Phuri 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で基字に先行する子音がない有声音字 g, j, d, b, dz, zh, z は、基本的にそれぞれの調音点の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようである。

´pa「めす牛」(*ba*)　　´ʂə wa「帽子」(*zhwa*)

´to:「熊」(*dom*)　　´se: tɕʰɯ「露」(*zil chu*)

ただし、蔵文 zh, z が語中にある場合は有声音として実現される。

´sẽ「ごはん」(*zan*)　　`ᶯɟe: zẽ「米飯」(*'bras zan*)

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようである。

´ɕa「鶏」(*bya*)　　`ʈɔʔ「6」(*drug*)

´tɕɔ̃「壁」(*gyang*)　　´ɕɑʔ kʰa「がけ」(*brag kha*)

以上の蔵文有声音字に先行子音（頭字、前接字）が存在するとき、Phuri 方言では有声音で現れる。たとえば、以下のようである。

`ʱgɯ「9」(*dgu*)　　^ʱdʑa「漢族」(*rgya*)

`ʱdʑə wa「蚤」(*lji ba*)　　´ʐə「4」(*bzhi*)

^ʱdu luʔ「石」(*rdo log*)

なお、蔵文 *dbugs*「空気」の対応形式も有声閉鎖音が現れ、´ʱbɔʔ となる。

有声性に関するいずれの特徴も、周辺のチベット語方言と共通である。

3.1.2　蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式

次に、蔵文足字 y, r の対応形式を取り上げる。というのは口語形式として蔵文足字 y, r が基字とともに音変化を起こし、その結果調音点の異なる破擦音や摩擦音が成立させていることが大半で、これらの口語形式と蔵文に基字としてもともと存在する c, ch, j, sh, zh などの口語対応形式とどのように合流しているかが方言差異を分析する手がかりになるからである。

蔵文 Ky 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

ˆʱdʑa「漢族」(*rgya*)　　ˋʰtɕoː kwa「酸っぱい」(*skyur po*)

ˋtɕʰʉʔ「あなた」(*khyod*)

ただし、蔵文 *khyi*「犬」はˋtsʰəのように歯茎破擦音が対応する。
以上の状況は周辺のチベット語方言と共通である。

蔵文 Py 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

ˋɕʰɔː wo「裕福な」(*phyug po*)　　ˋʰɕɔ̃ cʰə「狼」(*spyang khu*)

ˊɕa「鶏」(*bya*)　　ˋʱʑɔ̃「学ぶ」(*sbyang*)

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応するというのは、Chaphreng 方言群が歯-歯茎音に対応するのを除き、周辺のチベット語方言と共通である。

蔵文 Kr 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

ˋtɕʰɑʔ「血」(*khrag*)　　ˋŋgo ʰtɕa「髪」(*mgo skra*)

ˊtɕə dʑɔ̃「ナイフ」(*gri chung*)

ただし、語によって硬口蓋閉鎖音やそり舌閉鎖音に対応する。

ˋɲcʰeː ja「胆嚢」(*mkhris pa*)　　⁻ᶯɖẽ mo「客」(*mgron po*)

ˋʱɖa wo「敵」(*dgra bo*)

この状況は Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 同じ方言群のいくつかの方言と共通である。同じ下位方言群でも、硬口蓋による調音を持つものがある。

蔵文 Pr 対応形式

蔵文'br を除いて、基本的に前部硬口蓋摩擦音に対応する。

´ɕə「書く」(*bri*)　　ˋʰɕẽ「雲」(*sprin*)

ˋɕʰa lje「細い」(*phra ?*)　　ˋʱʑʉ:「蛇」(*sbrul*)

「細い」の例の第２音節は対応する蔵文が不明であるため、?で示している。
この状況は Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 方言群のいくつかの方言と共通である。
蔵文'br は基本的に前鼻音を伴う硬口蓋閉鎖音に対応する。

ˋⁿɟə「めすヤク」(*'bri*)　　ˋⁿɟe:「米」(*'bras*)

ˋⁿɟɔʔ「龍」(*'brug*)

蔵文 c/ch/j 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

ˋtɕʰɯ「水」(*chu*)　　⁻ʱdʑeʔ ba「重い」(*ljid pa*)

´tɕa「茶」(*ja*)　　ˋʰtɕɯ「10」(*bcu*)

この状況は Chaphreng 方言群のチベット語方言と共通である。

蔵文 sh/zh 対応形式

基本的にそり舌摩擦音に対応する。

ˋʂʰa「肉」(*sha*)　　´ʂu wa「朝」(*zhogs pa*)

´ʂʰẽj pʰõ「木」(*shing phung*)　　´ʐə「４」(*bzhi*)

周辺のチベット語方言でも基本的にそり舌摩擦音に対応する。

まとめ

ここで扱った Phuri 方言における対応関係を整理すると、以下のようになる。

蔵文形式	代表的な対応音	蔵文形式	代表的な対応音
c/ch/j	前部硬口蓋破擦音	sh/zh	そり舌摩擦音
Ky		Kr	前部硬口蓋破擦音*
Py	前部硬口蓋摩擦音	Pr	前部硬口蓋摩擦音
		ただし'br	硬口蓋閉鎖音

*をつけた Kr 対応音には硬口蓋閉鎖音やそり舌閉鎖音をもつ例も少なくない。

その他

以上で触れなかった蔵文足字 r を含む形式に sr-がある。Phuri 方言の対応形式は、周辺の方言とほぼ同じく、以下のように基本的に足字 r の脱落と分析できる。

ˋʰsoʔ「命」(*srog*)　　ˋʰsɔː pje「薄い」(*srab ?*)

⁻ʰsẽ ma「豆」(*sran ma*)　　ˋʰsa ʰkõ「硬い」(*sra ?*)

3.1.3　蔵文 l/y 対応形式

Phuri 方言の周辺の方言では、蔵文 l/y 対応形式が大きく異なる。

まず、Phuri 方言の蔵文 l 対応形式は、蔵文 l, sl, lh の場合、以下のように/j/または/ç/となる。

ˊjɔ̃「道」(*lam*)　　⁻ça「神」(*lha*)

ˊjɔʔ「羊」(*lug*)　　ˋçɔ̃「靴」(*lham*)

ˊjo「年」(*lo*)　　ˋçɔʔ「教える」(*slab*)

この特徴は Chaphreng 方言群や Sems-kyi-nyila 方言群 Lamdo 方言と一致し、rGyalthang 下位方言群の諸方言とは一致しない。後者では蔵文 l に/l/または/l̥/が対応する。

ほかの l を含む蔵文形式の場合、/l/または/l̥/となる例がある。

ˊtɕʰɯ ᶠlɔ̃「水牛」(*chu glang*)　　ˋʰl̥ɔ̃「風」(*rlung*)

ˋᶠla「魂」(*bla*)

ただし蔵文 zl の対応形式には/ⁿd/があたり、ˊⁿda gɛː「月」(*zla dkar*) などがある。また、ˊloñ「南」(*lho*) などの対応関係は例外と考える。

次に、Phuri 方言の蔵文 y（基字）対応形式は、以下のように/ʑ/となる例と/j/の例が確認される。

ˊʑi ᶠjə「本」(*yi ge*)　　ˆjeː ʰto「以上」(*yar ?*)

ˋᶠʑe wã「花椒」(*g.yer ma*)　　ˆjəʔ「持っている」(*yod*)

蔵文 y（基字）対応形式が/ʑ/となる点を見ると、これは周辺のどの方言とも一致しない特徴であり、Chaphreng 方言群では/z/に、rGyalthang 下位方言群では/j/が対応する例がある点で異なる。

3.1.4　蔵文足字 w 対応形式

Phuri 方言では、蔵文足字 w 対応形式として、/wa/という音節が現れると分析できる。その際、先行音節の母音は/ə/となる。

$^{-h}$tsə wa「草」(*rtswa*)　　ˊʂə wa「帽子」(*zhwa*)

ˊrə wa「角（つの）」(*rwa*)

しかし、ˆts^{h}a「塩」(*tshwa*) などには/wa/が現れない。

この特徴は Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言で認められるが、Phuri 方言と同様の対応を見せるものと、1 音節でかつわたり音/w/を伴う形式が対応する。

3.2　母音および母音＋末子音

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、蔵文再添後字 s は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。また、空白の箇所は対応形式が不明である。

V\C	#/'	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	ɔʔ	eʔ	ɑʔ	ɔ̃	ẽ / ɛ̃	ɔ̃	ɛː / eː	iː / eː	eː
i	ə		eʔ	eʔ / iʔ	ẽ	ĩ / ẽ	ĩ / ẽ / ẽj		iː	ej / eː
u	ɯ	uʔ	iʔ	uʔ / ɔʔ	õ	ẽ / ɛ̃	ɔ̃	ʉː	ʉː / eː	
e	e / ə	ɔwʔ	eʔ / ɛʔ	ɑʔ	ɔ̃	ẽj		eː	ʉː / eː	eː
o	o	ɔʔ	eʔ / iʔ / əʔ	oʔ / uʔ	õ	ẽ / ẽj / ẽj	õ	əː	əː	ʉː

Phuri 方言では、蔵文との対応関係が一対一になならないものが比較的多く、上に示したのは単なる傾向である。

特に注目できるのは、蔵文後接辞 d, n, l に対応する口語形式が複数認められる点、蔵文 or が中舌円唇母音になる点などが挙げられる。これらは周辺の方言で多く見受けられる特徴とは言い切れない。

4　Phuri 方言の語彙形式の特徴

4.1　古蔵文に対応する口語形式

迪慶州のチベット語の中には古蔵文に対応する口語形式をもつものがあることが知られているが、以下にその言及に当てはまる例を掲げる。

語義	Phuri 方言	蔵文	古蔵文	語義	Phuri 方言	蔵文	古蔵文
目	ˋ^{ɦ}ɲeʔ	*mig*	*dmyig*	火	¯ɲə	*me*	*smye*
名前	ˊɲɔ̃	*ming*	*mying*	夢	¯ɲiː jɔ̃	*rmi lam*	*rmyi lam*
～でない	ˊɲi	*mi*	*myi*	ない	ˆɲɛʔ	*med*	*myed*

以上に掲げた語形式は、いずれの方言においても古蔵文との関連が見出される。

4.2 音節の縮約

蔵文で２音節で構成される語が、口語形式で１音節に縮約する形式が現れる。

ˈkʰɑː「雪」(*kha ba*)
ˈɕãː「砂」(*bye ma*)
ˈɦõː「乳」(*'o ma*)
ˈʱzuː「大工」(*bzo ba*)
ˈŋgɑː「鍛冶屋」(*mgar ba*)
ˈsʰoː「櫛」(*so mang*)
ˈkaː「柱」(*ka ba*)

口語形式は声調が上昇調で長母音になっていることに特徴づけられる。このような例は、蔵文の第２音節が *ba*、*ma* などの音節であるものが多い。縮約するかどうかは語によって決まっており、条件に合う蔵文形式をもつもの全てが１音節に縮約するのではない。また、語末位置では長母音で現れるが、当該音節が語中に来た場合、短母音で現れることもある。たとえばˈɦõ dʑa「ミルクティー」(*'o ma ja*) などがある。

この種の縮約は周辺の方言でも少なからず見られるが、方言によってどの語が縮約するかすべて異なっている。

5 Phuri 方言の方言特徴

３節において、Phuri 方言の蔵文から見た諸特徴を簡潔にまとめた。本節ではこれらの特徴について、Phuri 方言の周辺で話される方言の事例と対比することを通じて、その方言特徴を明らかにする。

Phuri 方言は、**1.1** に示した通り、Sems-kyi-nyila 方言群の独立下位方言を形成している。また、Phuri 方言の周囲には、北に Chaphreng 方言群 gTorwarong 下位方言群の諸方言が話され、南へ約７ km の地点にある初古 [mTsho-mgo] 村以南の地域では Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群の諸方言が話される。近接してはいないものの、東には Sems-kyi-nyila 方言群の独立下位方言である Lamdo 方言が話される。

Phuri 方言は、３節に挙げた蔵文との音対応という特徴において、以上の３種の方言とそれぞれ一部分ずつ対応関係を持っている点で非常に興味深い。以下に、３節で扱った特徴のうち、「蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式」(**3.1.2** 節参照)、「蔵文 l/y 対応形式」(**3.1.3** 節参照) および「蔵文末子音字 r を伴う形式」(**3.2** 節参照) について、それぞれ各方言群との対応関係をまとめていく。

5.1 蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式

まず、蔵文 c/ch/j 対応形式を中心にすえて見る。Phuri 方言では蔵文 c/ch/j 対応形式、蔵文 Ky 対応形式、および蔵文 Kr 対応形式の一部が合流し、前部硬口蓋破擦音で現れる。合流のパターンを考えると、蔵文 c/ch/j 対応形式と蔵文 Ky 対応形式のみが合流するのは、Chaphreng

方言群に認められる。rGyalthang 下位方言群では、これら３種の蔵文対応形式のすべてが異なるか、または蔵文 Ky 対応形式と蔵文 Kr 対応形式のみが合流する（鈴木 2012）。Lamdo 方言では３種の蔵文対応形式のすべてが異なる（鈴木 2010）。rGyalthang 下位方言群のいくつかの方言には、蔵文 c/ch/j 対応形式が Phuri 方言と同様に前部硬口蓋破擦音で現れる例があるが、これは後続の母音が前舌狭母音であるか、またはかつてそうであったと考えられる形式に認められる現象であるため、Phuri 方言のような体系的な対応関係ではないといえる。よって、Phuri 方言の体系的な蔵文対応形式はまったく周辺の諸方言と一致を見ない。一方で、蔵文 c/ch/j 対応形式が前部硬口蓋破擦音で現れるのは Chaphreng 方言群と一致する特徴である。

次に、蔵文 sh/zh 対応形式について見る。Phuri 方言ではそり舌摩擦音で現れる。この対応関係は基本的に下位方言の分類にかかわらず香格里拉県内で話される周辺のすべての方言と一致する。Chaphreng 方言群の中でも四川省内で話される諸方言では前部硬口蓋摩擦音で現れることから、一種の地域特徴であるといえるだろう。この特徴によって特定の下位方言に所属するかどうかは議論できないと考える。

5.2　蔵文 l/y 対応形式

蔵文 l 対応形式について、Phuri 方言では/j/に対応する例と/l/に対応する例の２通りに分かれる。前者は蔵文 l が単独で現れる場合に多く現れ、後者は蔵文 l に先行子音がある場合に多く現れる傾向にある。前者の対応関係は Lamdo 方言や Chaphreng 方言群に見られる現象と一致し、後者の対応関係は rGyalthang 下位方言群と一致する。ただし、前者の諸方言には後者の対応関係も認められる。また、蔵文 sl/lh の組み合わせについては、Phuri 方言では/ç/に対応するのが通例であるが、この特徴もまたは Lamdo 方言や Chaphreng 方言群に共通する（ただし Chaphreng 方言群 gTorwarong 下位方言群の中には例外もある）。以上のことから考えると、Phuri 方言に認められる蔵文 l 対応形式は Lamdo 方言や Chaphreng 方言群と共通するということができる。

蔵文 y（基字）対応形式について、Phuri 方言では/ʑ/に対応する例と/j/に対応する例の２通りに分かれる。この特徴について、/ʑ/となる点に関しては周辺のどの方言とも一致しない特徴であり、Chaphreng 方言群では/z/に、rGyalthang 下位方言群では/j/のみが対応するという点で異なる。調音位置は異なるが、蔵文 y 対応形式に摩擦音が対応するのは有標であると考えられるため、Chaphreng 方言群に酷似した特徴を備えているといえるかもしれない。

5.3　蔵文末子音字 r を伴う形式

蔵文末子音字 r を伴う形式は、Phuri 方言の資料の中に ir と ur の組み合わせに対応する例が認められない。Phuri 方言における蔵文 ar, er 対応形式については非円唇母音が、蔵文 or 対応形式には円唇母音が対応する。前者について、Chaphreng 方言群や Lamdo 方言では非円

唇母音に対応し、rGyalthang 下位方言群では円唇母音に対応するものと舌根の緊張を伴う非円唇母音に対応するものに分かれる（具体例は鈴木 (2012) 参照）。Phuri 方言と近い地域で話される rGyalthang 下位方言群の方言では、円唇母音に対応する。また、蔵文 or 対応形式はいずれの方言群でも通常円唇母音となるが、後舌の場合が多く、中舌になるものは Phuri 方言と近い地域で話される rGyalthang 下位方言群の方言に限られる。このため、Phuri 方言の対応形式は Chaphreng 方言群と rGyalthang 下位方言群の一部の方言と双方の特徴を共有していることになる。

***

以上、３点の蔵文対応形式について検討してみると、Phuri 方言は Chaphreng 方言群の特徴に近いものをより多くもっていると分析できる。

6　まとめ

本稿では、Phuri 方言の方言特徴を蔵文を基準に分析するとともに、その各種特徴について、Phuri 方言の周辺で話されるカムチベット語諸方言と対照し、相違点を考察した。Phuri 方言の話される地域は、ちょうど Sems-kyi-nyila 方言群と Chaphreng 方言群の分布地域の境界地域になる。それゆえ、Phuri 方言に認められるさまざまな要素は、これら２つの方言群の特徴を折衷している点そのものが特徴的であるということができ、その背景については分布の観点から両方言群の言語接触が起こった可能性が容易に考えられる。ただし、共時的記述から言語接触がどのように起こったかを推測することは現段階では困難である。普上村周辺の村落の諸方言を記述することを通じて、考察を進める必要がある。

参考文献

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004)《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社

鈴木博之 (2010)「カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2010-35 巻 1 号 231-264

—— (2012)「迪慶州香格里拉県中央域カムチベット語（建塘/小中甸/格咱方言）の方言特徴」『ニダバ』第 41 号 61-70

Suzuki, Hiroyuki (2012) À propos du terme 'riz' et de l'hypothèse du groupe dialectal Sems-kyi-nyila en tibétain du Khams. *Revue d'étude tibétaine* Vol. 23, 107-115

[付記]

筆者による Phuri 方言の現地調査については、平成 23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007）の援助を受けている。なお、現地調査に当たっては昆明市の瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮の関係各位の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。